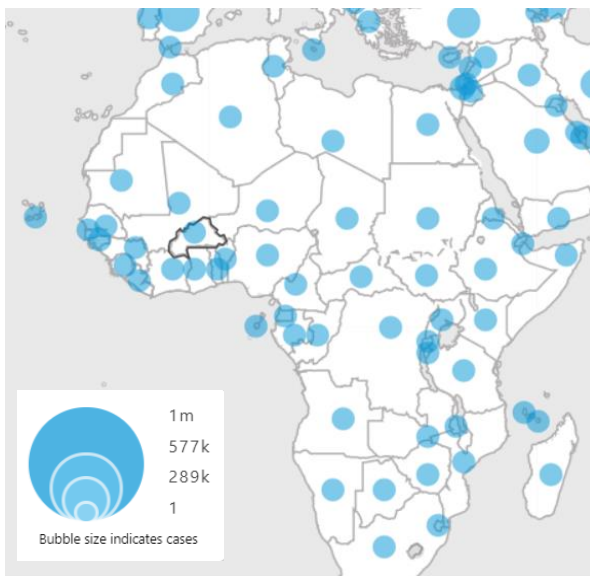


### ブルキナファソを旅して③ ～貧困をどうみるか？～

コロナ禍対応で自粛しておりましたシリーズ「ブルキナファソ」紀行の第3弾です。

アフリカ地域では、急増する人口増加と貧困に苦しむと同時に、公衆衛生知識の不足、極端な水不足、医療施設・体制の未整備、気候変動など多くの問題を抱えています。また、HIV、エボラ出血熱、ラッサ熱などの感染症にさいなまれており、また新たな感染症 COVID-19 に襲われているのです。WHO の発表によれば、5月5日現在、54か国 11億人の住むアフリカ大陸全体における COVID-19 感染者は4万強、死者も1835人で何とか拡大を食い止めていると言えます。

アフリカ地域に居住する私の知人と連絡がついたのは、ブルキナファソほか、コンゴ共和国、ケニア、タンザニアですが、知人の話では多くの国は3月上旬にはすでに国境を封鎖し、夜間外出も厳しく制限しました。その結果、図のようにどこもほぼ同じ感染者となっているので



アフリカの COVID-19 感染者数 DATA:WHO 5. 5, 2020

でしょう。中はカメルーンに海外出張したまま帰国もできず、もう2か月が経った知人もいます。

さて、ブルキナファソで今から60年以上も前に、夫妻で住み込み調査(フィールドワーク)をした元東京外国語大学の川田順造形さんは、文字を生み出した社会がアフリカの多くの文字を持たない社会の人々を「無知」「未開」という言葉で切り捨ててしまうのは、文字を持つ外来者の陥りやすい誤りだと指摘しています\*。アフリカ大陸を起原とする人類は、移住した土地の環境に合わせて経済を発展させ、生活を変化させて来ましたが、果たしてその変化は果たして幸せをもたらしたのでしょうか？

今から20年ぐらい前にアメリカ合衆国で始まった「アフリカへTシャツを送ろう！」というボランティア・キャンペーンがありました。しかし、このキャンペーンは、結果として多くのアフリカの人々不幸にしてしまったのです。ダイヤモンドや金などの地下資源の豊富な国を除き、アフリカ地域の多くの国にとって基盤産業は農業であり、数少ない製造業は繊維産業です。ボランティアの手により無料で配布されたTシャツが、製造業という小さな働き口を奪ったという不幸な事実、考えが至った人はいるのでしょうか。「Tシャツを送ろう」という、一見、耳障りのいい行為が、伝統文化や地場産業を破壊してしまうことになったのです。こうした行為が、上から目線の発想であったことに気づき、学ぶ必要があるでしょう。

つまり、広い視野に立って、それぞれの土地における環境と文化を考えた行動こそが大切なのです。また、「手洗い」という習慣がほとんどない社会、乾燥気候の拡大で慢性的な水不足の土地、そうした国でいかに COVID-19 感染症拡大を阻止すればいいのでしょうか？決して話は単純ではありません。エイズ、エボラ出血熱、ラッサ熱、デング熱しかり。いずれも、本来、人間が立ち入らなかった自然を大規模に開発したことに端を発する『ウイルスの逆襲』、環境危機を無視し続ける人類に対する「大自然の反応」\*と言えるのかも知れません。SDGs もしかり、便利さだけを追い求めるのではなく、自然と人類との共存を考える必要があるとも言えるでしょう。



左:ブルキナファソの伝統的織物業

中:織物に私も挑戦

右:マーケット内の布地屋

\*川田 順造[1976]『無文字社会の歴史』岩波書店、2001年岩波現代文庫に再録。

\*2020年4月8日ローマ教皇フランシスコの演説。